血液のはなし
「メヂカラ」と「ナカマ」のすゝめ

◎寺原　孝弘[1)]
済生会　日向病院[1)]

血液検査は，機械化革新により細胞数等のみならず細胞分類まで可能となった．白血病分類はフランス，アメリカ，イギリスの血液専門家から成る French-American-British（FAB）グループによって1976年に急性白血病の分類，1982年には骨髄異形成症候群（MDS）の分類が提唱され，さらに慢性骨髄性白血病と慢性リンパ性白血病およびそれらの類縁疾患についても提唱され世界的に普及した．何よりも光顕的手法（MG 染色,細胞化学染色）の取り入れによりどこの施設でも簡便に検査が可能であることも普及の要因であると考えられる．FAB 分類から細胞遺伝学的，分子生物学的情報を重視した WHO 分類への変遷により分子遺伝学と情報科学の急速な発展が活性化され，血液疾患の分子病態の解明と血液検査技術の飛躍的な向上により造血器腫瘍をより包括的に理解し再分類する動きになっている．このように造血器腫瘍分類が発展する中，我々はまず情報として提供される機器画面上のスキャッタグラム解析，作成された血液標本により細胞系統判断も要求される．そこにはまず「メヂカラ」が必要であることに何の疑いもない．「メヂカラ」こそがまさに基本であり未来への道標であると確信する．また「メヂカラ」の育成には「ナカマ」の育成も欠かせない．逆に言えば，地域を超えて、都道府県を超えて様々な問題点，情報，話題を共有できる「ナカマ」こそ「メヂカラ」の育成に欠かせないものと捉えることができる．すべてがコミュニケーションという言葉に集約されるのか疑問であるが，このシンポジウムが過去の自分に問いかけ，未来の目指す自分へのエールとなることを望む．